

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370509

研究課題名(和文) 現代語との対照に基づく近世江戸語文法形式の意味・機能に関する研究

研究課題名(英文) Study on modern Edo grammatical forms based on contrast with contemporary Japanese

研究代表者

岡部 嘉幸 (OKABE, Yoshiyuki)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：80292738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、現代語でも近世後期江戸語でも用いられる複数の文法形式(助動詞など、文法機能を果たす形式、たとえば、ハズダやカモシレナイなど)について、当該形式の近世江戸語での意味・機能的な特徴を、近世後期江戸語と文法体系の似通っている現代語との比較・対照という手法を用いることで明らかにした。また、本研究課題における文法形式の分析の中心は、モダリティ形式であったが、この分析の過程で、先行研究において議論の錯綜している「モダリティ」という文法概念の再検討も行った。さらに、江戸語資料の資料ジャンルの多様性や言語量の確保のため、他の研究課題と連携しつつ、人情本・洒落本のコーパス化も行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have clarified the meaning and functional features of Japanese grammatical forms in Edo era from the viewpoint of contrast with Contemporary Japanese. In addition, I reconsidered the concept of modality which is complicated in discussion in previous research. Furthermore, in order to secure the variety and quantity of Edo language materials, I also made corpus of ninjyobon and sharebon.

研究分野：日本語学

キーワード：江戸語 文法 現代語 対照研究 コーパス

1. 研究開始当初の背景

近世江戸語の文法形式に関する従来の研究は、多くの場合、どのような用例がどのような資料に何例存在するかという点の記述に重点が置かれ、各文法形式の意味的・機能的特徴の分析が不十分であった。そのような研究状況のもと、本研究課題研究代表者（以下、研究代表者）は、岡部（2000）「江戸語における終止形承接のソウダについて」（『国語と国文学』77-9）、岡部（2002）「江戸語におけるソウダとヨウダ」（『国語と国文学』79-10）、岡部（2004）「近世江戸語におけるラシイについて」（『近代語研究12集』、武蔵野書院）等の成果を踏まえ、「近世後期から明治期にかけての江戸語・東京語のモダリティに関する研究」（平成19-20年度科学研究費補助金（若手研究B）課題番号19720104、研究代表者：岡部嘉幸）を行った。その過程において、江戸語における文法形式の意味・機能のより精密な記述のためには、現代語における同形式との比較・対照という観点からの分析が非常に有効であるという結論を得た。なぜならば、江戸語と現代語とでは、文法体系が非常に似通っており、用いられる文法形式も、多くの場合、同形態である（たとえば、モダリティ形式としては、ヨウダ、ラシイ、ソウダなど）が、それぞれの時代における使用例を詳細に検討していくと、その意味や機能に微妙な差異が見いだされ、その微妙な差異こそが、現代語とは異なる江戸語としての文法形式の意味・機能的な特徴だと見なせるからである。もちろん、従来の研究においても、江戸語と現代語とを対照するという手法は存在したが、あくまでもそれは補助的・部分的な手段でしかなかった。これに対し、研究代表者はこの手法を意識的・方法的に採用し、岡部（2011）「現代語からみた江戸語・江戸語からみた現代語 ヨウダの対照を中心に」（金澤・矢島編『近世語研究のパスpekティブ』、笠間書院）、岡部（2011）「江戸語の推定表現」（青木編『日本語文法の歴史と変化』、くろしお出版）ではモダリティ形式ヨウダ・ソウダの分析を、岡部（2011）「否定と共起する「必ず」について 近世後期江戸語を中心に」（『人文研究』40）では副詞カナラズの分析を行い、これらの形式の精密な分析には「現代語との比較・対照」という手法が有効であることを実証的・論理的側面から示した。これを受けて、本研究課題では、さらに多くの現代語と江戸語とで同形態である文法形式をとりあげ、「現代語との比較・対照」という手法を用いてそれらの文法形式の意味・機能のより精密な記述を行い、そのことをもって「現代語との比較・対照」という方法論が江戸語の文法形式全般の分析にとって有効であることを示すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究課題は、以上のような背景から、以

下の目的をもつ。

(1) 申請者のこれまでの研究とより密接に関連するモダリティ形式・否定表現形式などを中心的に取り上げ、それらの形式について、現代語との比較・対照という観点から、江戸語の諸形式の意味・機能的特徴の精密な分析・記述を行う。その上で、なぜそのような異なりが生じるのか、言い換えれば、そのような異なりを生じさせる江戸語の文法形式の性格はどのようなものかを分析する。

(2) (1)の分析と連動させつつ、先行研究でその概念規定が問題となっているモダリティという文法概念についての本研究課題なりの見解を示す。

(3) 近世江戸語資料の資料ジャンルの多様性と言語量の確保のため、研究代表者が研究分担者として参画している他の科研費課題や国立国語研究所共同研究プロジェクトと連携しつつ、人情本や洒落本の精度の高いコーパスを構築する。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究課題では以下のような研究の方法をとった。まず、研究の目的(1)の「近世江戸語の諸形式の意味・機能的特徴の分析」については、現代語および江戸語の当該形式に関する先行文献の収集と内容の検討を行い、現代語および江戸語の当該形式の用例収集を行い（現代語に関しては、BCCWJ：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を、江戸語に関しては、主に人情本、洒落本コーパスを用いた）、収集した用例を、意味・用法や文法的性質（たとえば、上接語句の種類や構文環境など）に着目して分類した上で、江戸語と現代語との比較・対照を行い、どのような点が現代語と江戸語とで共通し、どのような点が現代語と江戸語とで異なるのかを分析する、という方法をとった。研究の目的(2)の「モダリティ」という文法概念の検討については、先行研究の収集と内容の批判的検討という方法をとった。また、研究の目的(3)「人情本や洒落本を対象とする精度の高いコーパスの構築」については、研究代表者が研究分担者として参画している他の研究課題や共同研究（主に国立国語研究所の共同研究）と連携すること、テキストの精度を上げるために、近世語の専門知識をもつ大学院生等に謝金業務として本文校訂作業を依頼するという方法をとった。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果は以下のとおりである。なお、本研究課題の中心的興味は近世期にあったが、それに接続する明治・大正期、昭和初期にまで視野を広げて、複数の文法形式の意味・機能的特徴を論じた。これにより、

より相対的、総合的に各文法形式の意味・機能的特徴を分析することができた。これは当初の想定を超える成果であるといえる。

(1) 近世江戸語におけるモダリティ形式ハズダの意味・機能的な特徴を、現代語と比較・対照することで、明らかにした。より具体的に言えば、現代語と近世江戸語におけるハズダの用例数の分布を分析し、現代語のハズダは、当該事態が現実に成立していると思えない状況で、その事態の理屈上の成立を語ることで、当該事態が現実に成立する蓋然性や正当性を主張するための形式として意識されていたのに対し、江戸語のハズダは、当該事態が理屈の上で成り立つことを語ることで、把握されている現状を是認したり貧したりするための形式として意識されていることを明らかにした。この成果は、岡部(2014)として公表した。

(2) 近世江戸語の指定表現の否定形態の特徴を、同時代の上方語や近代東京語と比較・対照することで、明らかにした。より具体的に言えば、近世語資料としては『洒落本』を、近代語資料としては『近代 SP 盤落語レコード』文字化資料を主要調査資料として調査を行い、各期における指定表現の否定形態の実態を記述した。その結果、近世江戸語ではジャアネエという形態が一般的に用いられたことがわかった。近代上方語ではジャンナイという形態が、近代東京語ではジャンナイ・ジャンネエという形態が一般的に用いられていたということと比較すると、指定辞部分にもっぱら長呼形(ジャア)を用いること、否定辞部分に音訛形(ネエ)を優先的に用いることが江戸語の特徴であることが明らかになった。この成果は、金澤裕之、矢島正浩、岡部嘉幸ほか(2017)として公表予定である。

(3) 近世江戸語における着点・方向を表す格助詞「に」と「へ」の使い分けの特徴を、現代語と比較・対照することで明らかにした。より具体的に言えば、現代語の場合、着点・方向を表す格助詞としては、圧倒的に「に」が使用されるのに対し、近世江戸語においては、「へ」が使用される傾向が強いこと、また、近世上方語においても近世江戸語と同様に、「へ」が使用される傾向が強いことを明らかにした。また、近世江戸語における格助詞「に」と「へ」の使い分けについて、洒落本コーパスを対象として調査を行い、移動行為の具体性、前接名詞における場所性の明示、定型的表現かどうか、文体(文語性) 状態化形式の付加、などが関わる可能性を指摘した。以上の成果は、口頭発表として、OGISO・OKABE(2014)および岡部(2014)で公表した。

(4) 明治・大正～昭和初期にかけての東京語における丁寧の助動詞マスの終止・連体形

の特徴を、現代語と比較・対照することで明らかにした。より具体的に言えば、『近代 SP 盤演説レコード』を対象として、明治・大正期から昭和初期にかけての「演説」、「講演・講話」の日本語における丁寧の助動詞マスの終止・連体形がどのような様相を呈していたのかを、現代語では使用されないマスルという形態の使用状況に注目しつつ明らかにした。明らかになったのは以下の点である。

全体的な傾向としては、マスは終止法において、マスルは非終止法において用いられる傾向がある。発話者の生年から見ると、発話者の生年が早いほど、終止法においてはマスを優先的に使用しながらもマスとマスルを併用する傾向があり、非終止法においてはマスルを優先的に使用する傾向がある。終止法において希に使用されるマスルは、その文をより丁寧に、あるいは格調高く述べるといった機能をもつと考えられる。その点で、この時期のマスルという形式は「特別丁寧体」あるいは「荘重体」という文体を構成するための形式として意識されていた可能性がある。以上の成果は、相澤・金澤・岡部ほか(2016)として公表した。

(5) 先行研究において、意見の相違が大きい「モダリティ」という文法概念について、先行研究を批判的に検討しながら、一定の見解を示した。より具体的に言えば、文において客観的内容を表わす「命題」と対置される「話し手の主観的把握」(話し手の発話時における心的態度)を「モダリティ」と呼ぶ立場の先行研究の問題点を指摘した上で、文によって述べられる事態(内容)と話し手の現実との関係性を述べることに関わる意味を「モダリティ」と呼ぶべきであると主張した。さらに、モダリティというものを、叙法の一角に位置づけ、「ある事態を非現実の事態として述べることに関わる意味である」と規定した。また、非現実事態の諸相について、先行研究に導かれて、大まかな見取り図を描くとともに、モダリティ形式の分類として、「事態内容前景型」と「判断作用前景型」が考えられるということを示した。以上の成果は、岡部(2013)として公表した。

(6) 関連する他の研究課題や共同研究プロジェクトと連携しながら、近世語資料である人情本・洒落本の精度の高いコーパスや電子化テキストを構築した。研究代表者が中心となって行った作業としては、人情本刊行会編『人情本集』所収の人情本『玉菊全傳 花街鑑』(文政5(1822)年、鼻山人著)、『廓鑑余興 花街壽々女』(文政9(1826)年、鼻山人)、『浮世新形 恋の花染』(松亭禁水、天保3(1832)年)、『鶯塚千代の初声』(松亭禁水、山々亭有人、安政3(1856)年)の電子テキスト化・本文校訂作業がある。また、国立国語研究所と連携して、人情本『比翼連理花迺志満台』(松亭金水、天保7(1836)-天保9

(1838年)のコーパス化を行い、その成果を、日本語学会 2015 年度秋季大会(山口大学、山口県教育会館、山口県立図書館、2015年10月31日-11月1日)において発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

藤本灯、北崎勇帆、市村太郎、岡部嘉幸、小木曾智信、高田智和、「人情本コーパス」の設計と構築」、『国立国語研究所論集』12号、国立国語研究所、査読あり、2017年、1-12

岡部嘉幸、「モダリティに関する覚え書き」、『語文論叢』28号、千葉大学文学部日本文化学会、査読なし、2013年、75-96

[学会発表](計4件)

岡部嘉幸「いわゆる「非情の受身」の諸類型 中古語と近世語との対照も含めて」、『研究発表会「バリエーションの中での日本語史」(招待講演) 大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市)、2016年4月30日

岡部嘉幸、「現代語からみた江戸語文法」、『東京大学国語国文学会(招待講演) 東京大学本郷キャンパス、2015年4月18日

岡部嘉幸、「洒落本における格助詞「に」と「へ」について 洒落本コーパスを資料として」、『国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」研究発表会、国立国語研究所(東京都立川市)、2014年11月9日

OGISO, Toshinobu OKABE, Yoshiyuki, Design and compilation of the Sharebon Corpus, EAJS 14th International Conference (国際学会), リュブリャナ大学(スロベニア、リュブリャナ)、2014年8月31日

[図書](計3件)

金澤裕之、矢島正浩、岡部嘉幸、揚妻祐樹、小野正弘、川瀬卓、金水敏、坂井美日、清水康行、野村剛史、野村雅昭、宮内佐夜香、宮地朝子、村上謙、森勇太『SP盤落語レコードが拓く近代日本語研究』(担当箇所:「近世江戸語における指定表現の否定形 近世上方語、近代東京語・京阪語との比較」) 笠間書院(日本、千代田区)、総ページ数未定(1-19) 2017年(発行確定)

相澤正夫、金澤裕之、東照二、岡部嘉幸、小椋秀樹、尾崎喜光、高田三枝子、田中牧郎、南部智史、松田謙次郎、丸山岳彦、矢島正浩、

『SP盤演説レコードがひらく日本語研究』(担当箇所:「大正～昭和初期における助動詞マスの終止・連体形について マスルの使用状況を中心に」) 笠間書院(日本、千代田区)、299(131-154) 2016年

青木博史、小柳智一、高山善行、竹内史郎、仁科明、吉田永弘、衣畑智秀、深津周太、川瀬卓、森勇太、岡部嘉幸、福沢正樹、矢島正浩、西田隆政、『日本語文法史研究2』(担当箇所:「近世江戸語のハズダに関する一考察 現代語との対照から」) ひつじ書房(日本、文京区) 288(173-193) 2014年

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡部 嘉幸 (OKABE, Yoshiyuki)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号: 80292738